はじめに

本論集『〈3・11〉後の表現を考える』は、立教大学日本学研究所の第五六回研究例会「〈3・11〉後の表現を考える――演劇・サブカルチャー・文学・ドラマ――」（二〇一六年九月一七日／於・立教大学／司会＝金子明雄）の成果をもとに編まれたものである。

二〇一一年三月一一日に起こった東日本大震災から六年半が過ぎた今も、被災地にはグラデーションを帯びたように多彩な被災状況が広がっている。あの日から、あらゆる表現者（活動）は、震災という事態を前に「何ができるのか」を問い、さまざまな作品を発表し、議論をおこなってきた。前述の研究例会では〈3・11〉から経過した時間を視野に入れながら、〈3・11〉に対する表現の視角について複数のジャンルから検討を試みた。

当日の発表者とタイトルは、以下のとおりである。

①後藤隆基「〈3・11〉と劇団四季――『ユタと不思議な仲間たち』の東北巡演を視座として――」

②山田夏樹「〈3・11〉とサブカルチャー表象」

③住友直子「埴谷雄高「死霊」を読み直す――〈3・11〉以後のなかで――」

④松本和也「坂元裕二ドラマにおける〈3・11〉――『最高の離婚』・『いつかこの恋を思い出してきっと泣いてしまう』を中心に――」

右のうち、後藤、山田、松本による三編は、発表内容に大幅な加除修正を施し、本論集に収録した。くわえて、四名の執筆者から新たにご寄稿を賜った。

渡辺憲司氏による巻頭エッセイ「二〇一七年九月一日福島浜街道雑記」は、氏が実際に被災地を訪ねた紀行文の体裁をとる。「二〇一七年九月一日」という〈現在〉と〈過去〉を交錯させながら、〈3・11〉後の世界をいかに氏自身が表現してきたかの軌跡を記述したものである。

金子明雄氏の「記憶すること・忘却すること・物語ること――芥川龍之介「疑惑」を手がかりに」は、明治二四年（一八九一）の濃尾大地震に際して起きた事件に材を採った芥川龍之介「疑

惑」（『中央公論』一九一七・七）の読解を通して、災害から生き残った人びとの「心のドラマ」の問題を炙りだしている。

宮田航平氏の「「文学」の在りか――〈3・11〉後から「児童文学」を考えるために」は児童文学の分野における〈3・11〉後のさまざまな動向を整理している。

吉田恵理氏の「盲目の時間――〈3・11〉後に読む中原中也」は〈3・11〉に辺見庸らが中原中也の詩「盲目の秋」に普遍性を見いだしていたことに着目し、中原の評論と五篇の〈蛙〉詩の分析を通して、中原と辺見を架橋する表現のありようを考察する。

山田夏樹「川上弘美「神様２０１１」、竜田一人「いちえふ」、カトーコーキ『シンサイニート』が浮彫にする戦後日本の問題性――東日本大震災後の文学、マンガの表象分析」は、川上弘美の小説をとば口に複数のマンガ作品を扱い、日本において戦後から震災後まで列なる種々の〈矛盾の隠蔽〉という問題を浮き彫りにする。

後藤隆基「東日本大震災と劇団四季――被災地を巡演する『ユタと不思議な仲間たち』」は、劇団四季のオリジナルミュージカル『ユタと不思議な仲間たち』の震災後の東北巡演を通して、演劇のもつ社会包摂機能やエンパワーメントの役割等について検討する。

松本和也「坂元裕二のテレビドラマにみる〈3・11〉――『最高の離婚』の時間軸」は二〇一三年に制作されたテレビドラマ『最高の離婚』において、作中の現在時間と〈3・11〉を往還する「時間軸」のありようと、作者あるいは登場人物（＝東京で震災を体験した人びと）の〈3・11〉との距離をも分析している。

＊

〈3・11〉後の諸表現については、個別のジャンルで言及されているが、それらが横断的に考察される機会はけっして多くない。本論集所載の各論考を並べることで、従来とは異なる視角が見いだされるのではないだろうか。そして各論考を通して、執筆者がそれぞれの立ち位置から〈3・11〉と向き合う機会を得たことも、ひとつの重要な意義ではなかったかとおもう。

なお、本論集のタイトルには〈3・11〉という言葉を用いているが、各論考では、執筆者によって〈3・11〉あるいは東日本大震災（震災）といった言葉を使い分けている。その判断は編

者の責任において、執筆者の意図に則ったことを断わっておく。

最後に、立教大学日本学研究所の関係各位ならびに、ご多忙中にもかかわらずご寄稿を賜った各氏に深謝申し上げる。

二〇一七年九月

後藤隆基